

「興味・関心や意欲」を重視した英語活動

－ 英語活動集「小学校英語活動 15」の作成 －

竹久保明弘¹

積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることを目標の一つとしている小学校の外国語活動では、言葉の本来の目的である「情報や意思を伝える」機会を提供することが前提となる。そして、聞いた英語が「生きた言葉」として感じられ、「意味のある言葉」として記憶に残るように、子どもたちに英語を聞かせることが大切である。このような状況を授業の中につくり出すために、本研究では、子どもたちの「興味・関心や意欲」を重視した英語活動を実践するための英語活動集を作成した。

はじめに

平成 18 年度の研究「小学校英語活動における教材開発の基本的な考え方」(以下「平 18 小英教材」という。)では、「内容」に工夫を凝らした指導法について明らかにし、それに基づく教材開発の基本的な考え方を示した。

平成 20 年 1 月の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申)(以下「答申」という。)においては、小学校段階で、中・高等学校においてコミュニケーション能力を育成するための素地をつくることが重要とされ、「(前略)国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る」ことを目標として、外国語活動を行うことが適当であるという考えが示された。そして、英語活動を原則とした外国語活動が小学校高学年において年間 35 単位時間位置付けられようとしている。また、本県における「神奈川力構想 実施計画 2007-2010」(以下「神奈川力構想」という。)においても、小・中・高等学校を通じ、英語による実践的コミュニケーション能力をはぐくむ取組を推進している。

子どもたちの積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を目指した英語活動を実践するためには、聞いた英語が「生きた言葉」として感じられ、「意味のある言葉」として記憶に残るように、子どもたちに英語を聞かせることが大切である。そのためには、子どもたちに「何を聞かせるか」が重要な要素となり、活動の中に、子どもたちにとって「聞いてみよう」、「考えてみよう」と思えるものがなくてはならない。それは、子どもたちに興味・関心や意欲を抱かせるような、子どもたちにとって身近な事柄、場面や、それらに適した言葉や文化に関することなどを指し、英語活動を促進するための素材となるものである。それを重視した英語活動が「興味・関心や意欲」を重視

1 カリキュラム支援課 研修指導主事

した英語活動である。

研究の目的

本研究は、子どもたちの積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るための英語活動の在り方を示し、各学校における英語活動の支援に資することを目的とする。

本年度は、「答申」の基となった平成 18 年 3 月の「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会外国語専門部会」における小学校英語教育の目標についての考え方と、「神奈川力構想」の基となった平成 16 年の「神奈川力構想 プロジェクト 51」を踏まえ、英語活動の「目標」と、その目標を達成するために「子どもたちに身に付けさせたいこと」を次のように設定し、それらに基づく英語活動集「小学校英語活動 15 子どもたちの積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するために」(以下「小英活動 15」という。)を作成した。

【目標】

子どもたちに言語や文化に興味・関心をもたせるとともに、子どもたちの積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を目指す。

【子どもたちに身に付けさせたいこと】

- 言語や文化に目を向けること
- 相手の話を聞いて、その内容を理解しようとする
- こと
- 態度や知っている言葉で、自分の気持ちや言いたいことを伝えようとする

研究の内容

1 トピックの選択及び具体的な活動案の組み立て方についての検討

「興味・関心や意欲」を重視した「小英活動 15」は、言葉の本来の目的である「情報や意思を伝える」機会を子どもたちに提供するために、「トピック」を素材としている。それは、英語を道具として使用し、英語で

意味を伝えるための活動を組み立てやすいからである。具体的な活動を組み立てるに当たっては、英語の句型や文法に焦点を当てるのではなく、まず、子どもたちを効果的に英語に慣れ親しませるための素材となる

「子どもたちにとって身近な事柄、場面や、それらに適した言葉や文化に関することなど」を用意し、そこに英語を取り込むことが大切である。英語に焦点を当てて活動を組み立てると、その内容と子どもたちの興味・関心や身近な場面との間にずれが生じる恐れがあるからである。そうなった場合には、子どもたちの創造性の発揮が制限され、「英語に耳を傾けよう」という意欲を持続させることが難しくなってしまうのである。

「小英活動 15」はまた、子どもたちの興味・関心や学習経験に合わせた様々な活動を用意し、その中で使用する英語表現自体はあまり変化させずに、扱う内容やその扱い方を変化させながら、活動を行える仕組みとしている。子どもたちを効果的に英語に慣れ親しませるようにするためには、同じ英語を繰り返し聞かせることが大切だからである。

「平 18 小英教材」では、「小英活動 15」の作成に向け、トピックの選択及び具体的な活動案の検討を更に進めていくことが課題となった。本研究では、調査研究協力員による授業実践及びその検証結果を基に、トピックの選択と、具体的な活動案の組み立て方について検討した。そうする中で、次の点が明らかとなった。

トピックの選択と、活動案の組み立て方について

- ・言葉が分からなくても、活動そのものを楽しみながら、想像力を働かせてその場の状況を推測し、子どもたちが「聞いてみよう」、「考えてみよう」という気持ちをもてる活動であることが条件となる。
- ・「遊び心」と「英語を聞かないとその活動ができない仕掛け」のある活動であることが条件となる。
- ・高学年は活動の「意味」の面白さを楽しむ傾向があり、日本語で行っても「おもしろい」と思える活動であることが条件となる。
- ・国語、社会、算数、理科などにおける既習内容を扱うと、その教科を得意とする子どもたちは特に意欲的に英語に耳を傾けるようである。
- ・学校行事、家庭科における調理実習など目前に迫った体験的な学習活動の内容を素材として扱うと効果的である。

その他

- ・トピックの選択や活動の組み立てには、子どもたちの実態を把握している学級担任が主体的にかかわることが大切である。
- ・子どもたちの興味・関心や意欲を持続させ、想像力をかき立てるためには、教師がジェスチャーを効果的に示したり、教材・教具等の提示方法に工夫を凝らしたりすることが大切である。

これらを踏まえ、次の 15 のトピックを選択した。また、そのうち第 1 表に示す八つのトピックを素材として「子どもたちにとって初歩的な英語活動」を前提に、授業開始時・終了時の挨拶などを除いた時間配分の中で行う活動の具体例として 15 の活動を組み立てた。基本的な内容を取り扱い、子どもたちを様々な英語表現に慣れ親しませることを意図した活動である。

<トピック>

- 1 数 2 生き物 3 色・形
4 からだの部位 5 地図 6 先生・友だち
7 月・曜日 8 食べ物 9 学校・教科 10 漢字
11 スポーツ 12 世界の国々 13 アルファベット
14 交通・乗物 15 歴史

第 1 表 「トピック」と「活動数」

トピック	活動数
数	3
生き物	4
色・形	3
からだの部位	1
地図	1
先生・友だち	1
月・曜日	1
食べ物	1
合計	15

2 中学校との円滑な接続に向けての検討

「平 18 小英教材」におけるもう一つの課題は、中学校で学ぶことになる英語表現や文法事項を整理し、それらを子どもたちに効果的に繰り返し聞かせることができるように、各活動に取り込むことであった。本研究では、各活動で使用する英語表現について、中学校との円滑な接続を考慮し、中学校で学ぶ英語表現のうちのいくつかを取り上げ、それらを各活動に取り込んだ。次に示すのはその中の代表的なものである。

- ・ What's this?
- ・ Is this a lion? Is this a fox? Is this a walrus? など
- ・ What body part is this? What number is this? What month is this? What color is this? など
- ・ How many cats are there on the board? How many cards do you have? How many triangles did you use? など
- ・ Who will do first? Who has the card for "library"? Who was born in April? など
- ・ Let's start. Let's count. Let's play a game. など
- ・ Look at the board. Make a group of four. Copy me. Raise your hand. Touch your nose. Open your eyes. Put the card on the map. などの命令文
子どもたちに「興味・関心や意欲」を抱かせるものを素材として活動を組み立てるため、単語については、中学校で学ばない単語も取り扱っている。

これらは、あくまでも活動を進める上で必要になる英語表現、すなわち活動を通して教師が子どもたちに聞かせる英語表現である。それらを子どもたちに教え

ることを意図しているのではないことをここで強調しておきたい。子どもたちは、活動そのものを楽しみながら、その中で用いられる英語表現に自然に慣れ親しんでいくことができればよいのである。そして、子どもたちが中学校で文型や文法などに関する知識を学ぶときに、小学校の授業で英語を聞いたときの様々な活動や場面を思い起こしながら、「そう言えば先生は何かの数を尋ねるときは“ How many ~ ? ”と言っていたよ」、「だから“ 8 shape ”ではなく、“ 8 shapes ”だったのか」、「だから先生に何かを指示されるときの“ Look ~ . ”、“ Make ~ . ”、“ Put ~ . ”は動作を表す単語で始まっていたのか」といったことに気付くことができればよいのである。これが、小学校段階で中・高等学校においてコミュニケーション能力を育成するための素地をつくることである。小学校の授業を通して聞いてきた英語を「生きた言葉」として感じ、「意味のある言葉」として記憶に残すことができている状態に、中学校段階で知識を加えることは、知識を支えとして、現実の場面に応じて意味のある表現を適切に使えるようになることの基盤となると考える。

3 英語活動のねらい

英語活動のねらいは、子どもたちに英語を教え込むことではない。小学校高学年では1年間に945時間の学習活動があるが、その中で英語活動に配分される時間は全体の数%でしかない。この程度の時間では、子どもたちは自分の気持ちや考えを英語で意のままに表現することができるほどの力を身に付けることはできない。このわずかな時間を「英語」という特別なものに充てるととらえるのではなく、すべての教科が相互に関連し合い、総合的な教科活動として実践される小学校教育の中の「一教育活動」としてとらえた上で、英語活動のねらいを設定することが大切である。

したがって、必ずしも子どもたちを英語の表現に慣れ親しませることだけが英語活動のねらいになるわけではない。例えば、「調べ学習」とつながりをもたせて、外国語指導助手（以下「ALT」という。）をはじめとするネイティブの先生が来る授業の前に、その先生の出身国について下調べをした上で話を聞くことができれば、子どもたちはより効果的な「異文化間コミュニケーション」を体験することができる。英語活動で国語、理科、社会などにおける既習内容を扱えば、学んだ内容を再確認させるとともに、あらためてその内容に興味・関心をもたせることができる。さらに、先生や友だちのことを扱ったり、グループによる作業を通じて友だちと協力し合ったりすることなどは、人に興味・関心をもたせ、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながる。「小英活動 15」に掲載の各活動のねらいは、これらを踏まえて設定したものである。

4 子どもたちの興味・関心、学校、クラス、学級担任の実態等様々な状況に応じた英語活動

「小英活動 15」における英語活動は、活動の順番、組合せ方、設定時間に決まったルールを設定しないことを基本とした。「興味・関心や意欲」を重視した英語活動は、「この英語に慣れ親しんだら、次はこの英語」という形で英語活動を進めていくものではない。子どもたちを効果的に英語に慣れ親しませるためには、その時々の子どもの興味・関心、学校行事、教科の既習内容などに合わせてタイムリーな活動を用意して授業計画を立てることが大切だからである。したがって、「小英活動 15」の各活動を示された内容のとおりに行う必要はない。子どもたちの興味・関心、学校やクラスの実態に応じて創意工夫を加え、活動内容を変更したり、自由に複数の活動を組み合わせたり、必要な部分だけを取り上げて授業開始時のウォーミング・アップ用にアレンジしたり、他の教材と併用したりすることが大切である。調査研究協力員の実践では、一つの活動をクイズ形式にアレンジして毎回の授業開始時に行ったところ、子どもたちがそれを楽しみに英語活動に積極的に取り組むようになったという例もある。

子どもたちが英語を聞くことに集中できるようにするためには、一つの活動にかかる時間を15~20分程度とし、子どもたちの興味・関心、意欲を持続させることが大切である。そのためには、複数の活動を組み合わせる1回の授業を行うことが望ましい。しかし、教師が慣れるまでは、授業の進行に時間がかかってしまうことが予想される。そこで、初めのうちは活動を一つに絞り、徐々に複数の活動を組み合わせればよい。教師の経験に応じて、無理なく授業を行うようにすることが肝要である。スムーズに授業を進めることができるようになって、子どもたちの状況によっては、時間どおりに進めることができないことがある。さらに、子どもたちが同じ活動をもっと続けたいと思うこともある。子どもたちが興味・関心を示す活動を、その中で扱う英単語を入れ替えながら、繰り返し行ったという調査研究協力員の実践例もある。

5 担任主体の授業実践 スクリプトの必要性

「興味・関心や意欲」を重視した英語活動を実践するためには、子どもたちの日常について熟知している担任が自ら、身近な教材・教具、視聴覚教材、ジェスチャーを効果的に活用し、表情豊かに、積極的に英語を使って語りかけながら、コミュニケーションを図ろうとする態度を子どもたちに示すことが大切である。このような形で担任が主体的に授業を実践することができるように、「小英活動 15」では、各活動にスクリプトを付け加えた。これは、担任がどのような英語表現をどのように使用していけばよいのかを活動の流れに沿って示したものであり、いわば、授業の台本であ

る。また、このスクリプトはALTとチーム・ティーチングの打合せを行う際の資料としても有効であり、どのような活動を行うのかをALTに短時間で伝えることを可能にするものである。なお、スクリプトの音声は「小英活動15」の付録CD-ROMに収録し、担任がそれを聞いて練習できるように配慮した。

研究のまとめ

小学校段階では、子どもたちが、聞こえてきた英語に対して「何て言ったのかな」と想像力を働かせながら「たぶんこんなことを言ったのかな」と推測し、「こんなことを伝えたいな」と考え、実際に自分の気持ちや言いたいことを表現し伝えようとするという体験を繰り返すことができるように、子どもたちを支援していくことが大切である。このような状況を授業の中に作り出すために、本研究では、「興味・関心や意欲」を重視した英語活動について検討を重ね、研究成果として「小英活動15」を作成した。これは、教師にとって、英語活動実践における入門書の役割を果たすものである。

本研究の今後の課題としては、小学校高学年において年間35単位時間位置付けられようとしている外国語活動の円滑な実施に向け、研究の内容1で示したトピックを素材として、「小英活動15」で使用した英語を取り込んだ、「小英活動15」よりも内容を発展させた活動内容を相当数用意し、年間をとおしての授業実践計画に対応する必要がある。

おわりに

英語活動が小学校教育の中に位置付くことは、子どもたちのもつ柔軟な適応力の可能性をさらに広げるとともに、小学校教育がさらに充実することにつながるといえる。しかし、ただ単に英単語や英文を並べて行う英語活動であれば、それは小学校教育本来の目的にふさわしくないものになりかねない。子どもたちの興味・関心、学習経験、学習環境などを十分に考慮し、子どもたちが英語と適切に関わりをもつことができるように英語活動を実践することが大切である。「小英活動15」が、小学校高学年にとってふさわしい英語体験を提供するための導入教材となり、各学校における英語活動の実践に寄与することができれば幸いである。

最後に、本研究を進めるに当たって多大なご協力をいただいた皆様に厚く感謝申し上げます。特に、昭和女子大学附属昭和小学校小泉清裕教頭には多くの御教示をいただいたことに深く感謝する次第である。

[調査研究協力員]

茅ヶ崎市立緑が浜小学校	髙崎 賢次
海老名市立社家小学校	山形 昭彦
二宮町立一色小学校	古正 栄司
南足柄市立南足柄小学校	中村 有佐
小田原市立足柄小学校	古屋 守

[助言者]

昭和女子大学附属昭和小学校 小泉 清裕

参考文献

- 神奈川県 2007 『神奈川県構想 実施計画 2070-2010』
中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf (2008年1月取得)
文部科学省 2003 「小学校英語活動実践の手引」 開隆堂
文部省 1999 『小学校学習指導要領解説 総則編』 東京書籍
ARCLE編集委員会 田中茂範 アレン玉井光江 根岸雅史 吉田研作 2005 『幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み ECF English Curriculum Framework』 リーベル出版
碓井淑美 2006 「小学校英語教育に関する研究」(神奈川県立総合教育センター 『研究集録』第25集)
影浦攻 2007 『新しい時代の小学校英語指導の原則』 明治図書
久埜百合 1999 『こんなふうに始めてみては？ 小学校英語』 三省堂
宗誠 2004 「高学年はこれがポイント！『知的好奇心をくすぐる英語活動！』」(佐賀県教育センター 『平成16年度 研究成果 授業に役立つ実践研究』)
http://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_chousa/h16/09syosougo/16toppage.htm(2008年1月取得)
竹久保明弘 2007 「小学校英語活動における教材開発の基本的な考え方」(神奈川県立総合教育センター 『研究集録』第26集)
トム・マーナー 2001 「学校・家庭で教えるための指導ガイド 楽しく教える子どもの英語 vol.2 『子どもたちの興味と関心にもとづく英語活動』」
http://www.oupjapan.co.jp/teachers/media/tebiki_funteachengkids2.pdf (2008年1月取得)
東仁美 スナイダー美枝 2004 「インプット重視の小学校高学年英語活動：英語での各国紹介の実践」(日本児童英語教育学会(JASTEC)『研究紀要』第23号)
松川禮子 2004 『明日の小学校英語教育を拓く』 アブリコット